

売薬の意匠あれこれ 〈その30〉 吊り下げ広告

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい・たもつ)

前号では店頭において紙のチラシやビラなどよりも長い期間広告の役目を果たす目的で作られた布製の暖簾(のれん)を紹介しました。

今回は暖簾から派生した広告アイテムの一つの「吊り下げ広告」を紹介します。吊り下げ広告には、よく目に入るものには電車やバスなどの公共交通機関の車両内の広告の(車内

告)うちでも通路に沿って吊り下げられた「中吊り広告」(週刊誌の宣伝が多い。車体側面上部の広告は「まど上広告」という)ありますが、今回紹介する「吊り下げ広告」はより立体的で手の込んだ「吊り下げ広告」で、店頭で風に揺られて回転したりする姿は一種の昭和時代の風情が感じられるものでした。

①「太田胃散」

「太田胃散」は今から140年以上も昔の明治12年(1879)に官許を得て発売された今もある伝統薬で、処方の原型は文久2年(1862)にオランダより来日して医学校の教師となり、多くの後進を育てた1等軍医ボードインが伝えたものです。その原料はほとんどが当時の英国植民地領のアフリカ、セイロン、中国などから取り寄せたもの(チョウジ、ニクズク、ウイキョウ、ゲンチアナ、ニガキ…)などで、今で言う芳香性苦味健胃薬、つまりスパイスと共通したものでした。

現在も基本的処方内容是不変の独特の芳香を持つ「太田胃散」は、肉食が多い現代人の胃薬としても適したものといえます。

②「サロンパス」

昭和3年(1928)に試作品が完成し昭和8年(1933)より全国的に販売が展開された貼付薬「トクホン」と共に現在に至る市販貼付薬の双璧をなす「サロンパス」は、弘化4年(1847)に小松屋を創業した久光仁平を創始者に持つ久光兄弟合名会社が昭和9年(1934)に発売したものです。

これらの貼付薬は江戸時代より使われていた従来の膏薬のような油臭いにおいでなく、ハッカの香りがする、またシール状にして絆創膏のようにすぐ貼れるように改良した絆創膏タイプの貼付剤で、日本独特の貼付薬文化を創り上げました。

③「ペニシリンパウダー」

現在は旭化成工業(株)(現 旭化成(株))と合併した伊豆地方の酒造業者がルーツの東洋醸造(株)が製造していた抗生物質のペニシリンや、ロイコマイシンを含有する汗知らず(「シッカロール」「打ち粉」)の吊り下げ広告です。

当時(昭和30年代)のこれらの商品の効果を見ると「ニキビ、吹出物等の化膿性皮膚病、軽い化膿性外傷」の他に、シッカロールの主目的である「あせも、たぎれ、おしめかぶれ、多汗症、体臭の悪臭除去」とあり、夏の風にそよぐ吊り下げ広告の形状の珍しさ以上に、当時では抗生物質が主剤の商品が使われていたことに驚きを禁じ得ません。

④「ライオン煉歯磨」

現在では「花王(株)」をライバルとする家庭用品総合メーカーの双壁「ライオン(株)」は、明治24年(1891)に小林富次郎翁によって設立され、明治29年(1896)には「獅子印ライオン歯磨」を発売しました。

百獣の王(業界トップを目指す)で丈夫な牙を持つ獅子(ライオン)が商品名の由来で、そのまま社名となったわけです。

現在では歯磨き剤といえば煉(ね)り歯磨きが主流ですが、これは歯磨き粉にグリセリン・発泡剤などを加えて練り合わせて半固形としチューブに詰めたもので、この吊り下げ広告もチューブの形をしてわざわざ「煉歯磨」と書かれています。

⑤「仁丹」

現在社名「森下仁丹(株)」の一部となっている口中清涼剤の「仁丹」は明治2年(1869)に生まれた創始者の森下博によって、明治38年(1905)に森下博薬房により発売されました。その成分は改良の余地のないほどベストとされ、創業当時と変わらずに現在も(カンゾウ、アセンヤク、ケイヒ、ウイキョウ、ショウガ、チョウジ、ヤクチ、シュクシャ、木香、薄荷腦、龍腦、甘茶、各種芳香性精油)からなっています。

かつて森下仁丹の医療機器部門であった「(株)仁丹テルモ」は昭和49年(1974)に森下グループから離脱し、現在の「テルモ(株)」となり医薬品ははじめ特に医療機器部門での大手メーカーとなっています。



①



②



③



④



⑤